# 芸術大学における「コミュニティデザイン概論」開講の意義と授業設計

# General Theory of Community Design at an Art University: Developments and Future Prospects

加藤　賢治
Kenji KATO
石川　　亮
Ryo ISHIKAWA
由井　真波
Manami YOSHII
田中真一郎
Shinichiro TANAKA
大草　真弓
Mayumi OKUSA

# 芸術大学における「コミュニティデザイン概論」開講の意義と授業設計

General Theory of Community Design at an Art University:
Developments and Future Prospects


| | |
|---|---|
| 加藤　賢治<br>Kenji KATO | 准教授（地域実践領域、宗教民族学、近江学） |
| 石川　　亮<br>Ryo ISHIKAWA | 准教授（地域実践領域、現代アート、近江学） |
| 由井　真波<br>Manami YOSHII | 客員教授（共通教育センター、コミュニティデザイン、Co-design） |
| 田中真一郎<br>Shinichiro TANAKA | 教授（総合領域、イラストレーション領域、デザイン） |
| 大草　真弓<br>Mayumi OKUSA | 教授（情報デザイン領域、グラフィックデザイン、インターフェースデザイン） |



General Theory of Community Design is a core subject of the Social Practice Subject Group. Here we will describe the significance of designing this class, which is based on societal background or existing societies and offering it to art university students. The two main points of the course design are 1) the importance of learning from the community and 2) creative activities centered around community design unique to Seian University of Art and Design.


## はじめに

「芸術による社会への貢献」という基本理念（教育理念）を掲げ成安造形大学では、開学当初から地域との交流を目指して活動を続けてきたが、平成22年（2010）に、より活発な地域活動を展開するため学内に地域連携推進センターという地域と大学を結ぶ組織を立ち上げた。社会的背景としては、大学という高等教育機関に対する社会の要請として、平成18年（2006）経済産業省の「社会人基礎力」を備えた人材育成という声が上がり、それに呼応して平成20年（2008）文部科学省中央教育審議会からは、社会に必要とされる「学士力」を身につけた人材育成のためのカリキュラムの構築が盛んに言われるようになっていた。

そして、開学20周年を迎えた平成25年（2013）の年度当初に、文部科学省が「地（知）の拠点整備事業（COC）」に取り組む大学を公募した。この事業は、大学が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的とするものであった。

その頃、本学では、地域連携推進センターを核に、教育理念に基づき、芸術分野における地域連携活動やプロジェクト授業など多彩な教育と研究を通して、独自の実践的学士課程教育を展開し、発想力・提案力・技術力に優れた人材の育成を目指しており、また、同時に自治体（特に滋賀県や大津市、草津市、近江八幡市）や、地元企業、NPO 法人等の各種文化芸術団体などとの連携活動が実践されていたこともあって、「地（知）の拠点整備事業（COC）」に応募することに決定した。

その後、平成 25 年（2013）11 月に当時地域連携活動やプロジェクト科目を主に担当していた教職員中心に、この論考の執筆に関わった由井真波、田中真一郎、大草真弓、石川亮、加藤賢治と、当時総合領域の主任を務めていた津田睦美の 6 名が、任意でコミュニティデザイン研究会を発足させ、地域社会の中でものづくりを活かした成安造形大学という芸術大学独自の地域貢献の考え方とコミュニティデザインに関する教育・研究内容の検討を始めた。平成 26 年度（2014）には学内の特別研究助成を受け具体的に「コミュニティデザイン」の授業内容の検討を開始した［註 1］。

本論考では、現在のカリキュラムの中で「社会実践科目群」の基幹となる科目（2 年生必修）となっている「コミュニティデザイン概論（以下「概論」）」の内容について以下にまとめた。

## 1. 授業の位置付けと意義

コミュニティデザイン研究会では、平成 25 年（2013）「地（知）の拠点整備事業」に申請する際に、教育の理念として本学独自のコミュニティデザインとはいかなるものかということについて以下の 2 点に整理した。

### 1-1　地域に学ぶことの重要性

学内から外へ出て「地域に学ぶ」ということは現代の学生にとって非常に有意義な教育手法であると考えている。一般に大学の機能が「高度な研究」であった戦後から高度成長期の頃は、基礎学力が十分に備わった学生が入学し、座学中心の科目を履修し、実社会に出たときにその学修が実を結び成果が出ていた。しかし大学進学率が上昇し現代の大半の大学においては、入学する学生の基礎学力が不十分で、従前の授業だけでは社会人として十分な能力を身につけることが困難な現状があると言われている。

成安造形大学は滋賀県内唯一の芸術大学であることから、ポスター・チラシづくりや、地域イベントでの似顔絵描き、アートイベントの企画、キャラクターやロゴマークの制作など様々な依頼が寄せられる。学生たちは授業の中で、またボランティアや、アルバイトというかたちで地域に出て行くことになる。実際に地域に出ると、

学生たちは、今まで知るよしもなかった様々な問題に直面し、それを解決するためその本質を知ろうと図書館へ足を運ぶ。ある時は「地域の歴史を学び直す」、「コミュニケーション能力をつける努力をする」、「ものづくりの技術をあげる」など、プロジェクトを通じて自分の能力を振返り、学びの動機づけにもつながる。当然これまでの授業の知識も大切であるが、いくつもの実践課題を経験することで、授業と実践を繰り返しながら社会人としての基礎的な能力を身につけて行くのである。

同時に学生たちは地域で活躍するキーパーソンと、現地や学内で交流するという多くの貴重な経験を重ね、また、学生や教員が地域をキャンパスとして、学外で活動することで想像を超える教育効果をもたらすことにつながる。

### 1-2　ものづくりを核とした本学独自の「コミュニティデザイン」

いわゆる「コミュニティデザイン」とは地域社会の中で人々の繋がりをつくるということであり、「ものづくり」のハード面よりもソフト面を重視した考え方である。人口が減少し、税収が減り、公共事業が縮小される近年、今までのような人口増に支えられた物質優位の社会が崩壊し、地域における活力は衰退する一方である。この状況を打破し、未来の地域社会へと切り拓くものとは、地域の人々が主役となって失われつつあるコミュニティを再構築し、物質ではなく心の豊かさを分ち合うことである。本学ではこの仕組みづくりを「コミュニティデザイン」と位置づけ、学生とともにコミュニティをあらゆる場面でつくりあげることを目標とする。

コミュニティデザイン研究会では、成安造形大学が「ものづくり」の大学であるため、その「ものづくり」を通して人々がつながって行けるような仕組みを提案する教育手法を研究し、実践する場としてふさわしいと考える。そしてより高度な地域貢献を通じた人材育成を行なうために、この新しい「ものづくりを核としたコミュニティデザイン」を成安造形大学の正課の授業内の取り組みとして実践することを考えた。その結果としてその手法を身につけた人材（本学卒業生）が、地域において活躍することで、今の時代にふさわしい文化振興が実践され、未来の観光振興・産業振興につながるといういわゆる社会イノベーションが実現し、持続可能な地域社会が創出される。その目的を達成するためのカリキュラムの核となる授業が「コミュニティデザイン概論」なのである。

以上のことを前提として、本学独自の社会実践教育の理念と全学の学生が必修で受講する「社会実践科目群」の基幹となる科目である「概論」の内容を提案するため、コミュニティデザイン研究会が検討を始めた。次項では、その科目が出来上がるまでの流れと、現在の科目概要をまとめた。

## 2. 共通教育センター科目「社会実践科目群」の基幹となる科目としての「概論」の設計

最終的に成安造形大学は平成25年度、および平成26年度の「地(知)の拠点整備事業」に採択されなかったが、検討を重ねてきた「概論」は本学の新カリキュラム改革に伴い、共通教育センター科目「社会実践科目群」の基幹となる科目(2年生必修)として平成27年(2015)度4月から開講することとなった。これは、今、日本の社会が抱えているグローバル経済中心の考え方から脱却できないために引き起こされる環境破壊問題、著しい地方の人口減少や少子化、高齢社会の到来による諸問題、コミュニティの希薄化による心のケアの問題などに学生たちが目を向け、そしてその解決の糸口としてコミュニティというものを再考する機会をつくろうとすることが背景にある。

この授業では、先述した地域に学ぶことや本学独自のコミュニティデザインの考え方などを踏まえ、2015年に国連が掲げた持続可能な開発目標「SDGs」や、日本の少子高齢化や人口減少社会に伴う地域の疲弊など、現代社会の大きな問題を客観的に捉えて、芸術大学で学ぶ学生が自分たちに何ができるのかを考え、将来社会での自分の役割は何かを考えることや、自身の制作や地域活動の糧となることを目的とする。

その目標を達成するため、自然環境やエコロジーも視野に入れたコミュニティ(共同体)そのものを社会学的、文化人類学的に学ぶ科目として、「近現代コミュニティの諸相」という内容と、より深く地域を見つめ、学際的に分析することで普遍的な価値を見出すために地域学(近江学)の内容を取り入れた。

下記の図1にあるように、具体的にはこの概論において①〜③の内容を学び、2年生以降に開講されている社会実践科目(プロジェクト演習、コミュニティデザイン論、近江学等)につなげ、専門科目群へと学びを深めるカリキュラム上の基盤的位置付けとなっている。

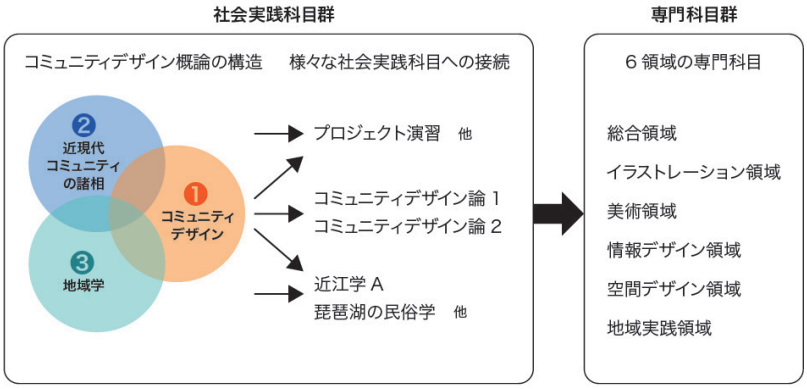


図1:「コミュニティデザイン概論」講座の構造と位置付け

### ①　コミュニティデザイン

コミュニティデザインとは、現代社会の中に存在する様々なコミュニティ（共同体）が抱える諸問題を解決の方向に向かわせる１つの手法である。今、身近で行われているコミュニティデザインの実例をもとに、その実例の共通点や、考え方、進め方などを理解し、その本質をとらえる。そして、身近にあるコミュニティの諸問題を、自らが持つものづくりのスキルを活かしてどのように解決できるのかを考える。

### ②　近現代コミュニティの諸相

国連が掲げる持続可能な開発目標「SDGs」の中において、特に、21 世紀の現代社会における、コミュニティ（共同体）そのものの重要性が語られている。特に大規模な自然災害の後、人間どうしの繋がりから、自然と人間の関わりなど、様々なコミュニティが浮びあがってきた。コミュニティ（共同体）の歴史を紐解き、文化人類学の視点でコミュニティの諸相を理解し、学びを深める。

### ③　地域学

もう１つ注目されているのが地域学である。日本にとどまらず世界各地には様々な地域が存在し、独特の文化がある。その地域を深く検証することによって全世界に共通する大切な普遍的価値を発見することができる。本学には、近江学研究所という地域学の研究所があり、「近江学」や「琵琶湖の民俗史」という科目が設定されている。これらの科目への導きも含めて、また近江という地域から見えて来る伝統的な地域コミュニティの有り様など、知識を深める。

（加藤賢治）

## 3. 現在の「概論」の内容

本学は、先述の通り、平成 25 年、26 年の「文部科学省地（知）の拠点整備事業」に採択されることはなかったが、平成 27 年（2015）「文部科学省地（知）の拠点による地方創生事業 COC ＋」（滋賀県内における知の拠点である滋賀県立大学と本学を含む６大学の連携で取り組む地方創生事業）に応募し採択された。その際、「概論」は、その事業の基幹科目である地域共生論として開講することとなった。結果的に、この科目は当初の目的であった地（知）の拠点となるための基幹科目としてその役割を果たすことになったのである。

### 3-1　授業の設計

開講にあたって、現在は芸術学部芸術学科の約 200 名の２年生を２クラスに分け、α クラス（総合デザイン領域・情報デザイン領域・空間デザイン領域・地域実践領域の学生）を加藤賢治（地域実践領域准教授・附属近江

学研究所副所長）が、βクラス（イラストレーション領域・美術領域の学生）を石川亮（地域実践領域准教授・附属近江学研究所研究員）の二人の教員が担当している。この２名の教員が前項の①～③の内容をもとに具体的に特別講師の人選を行っている。

①コミュニティデザインの内容の授業（1～3回目、5～10回目の授業）については、まず、京都でリンク・コミュニティデザイン研究所を主宰し、本学客員教授である由井真波が、コミュニティデザインとはという内容の概説と、コミュニティやそこで展開されるプロジェクトを分析する手法を教授し、その上で、4回にわたって6つの領域の学生が均等に自分ごととして捉えられるよう様々な実践者を招き、実践事例を解説してもらっている。②近現代コミュニティの諸相の内容については（4回目・11～12回目の授業）、本学客員教授の仁連孝昭が人間と人間だけでなく、自然と人間の関わりも含め、多様なコミュニティ（共同体）の歴史を紐解き、環境学や経済学、文化人類学など様々な視点で近現代のコミュニティを解説する。③地域学の内容については(13～14回目の授業)、地域を深く検証することによって全世界に共通する大切な普遍的価値を発見することができるという観点から、近江（滋賀県）というフィールドを見つめることを通して見えてくるものを附属近江学研究所研究員の加藤賢治と石川亮が担当している。

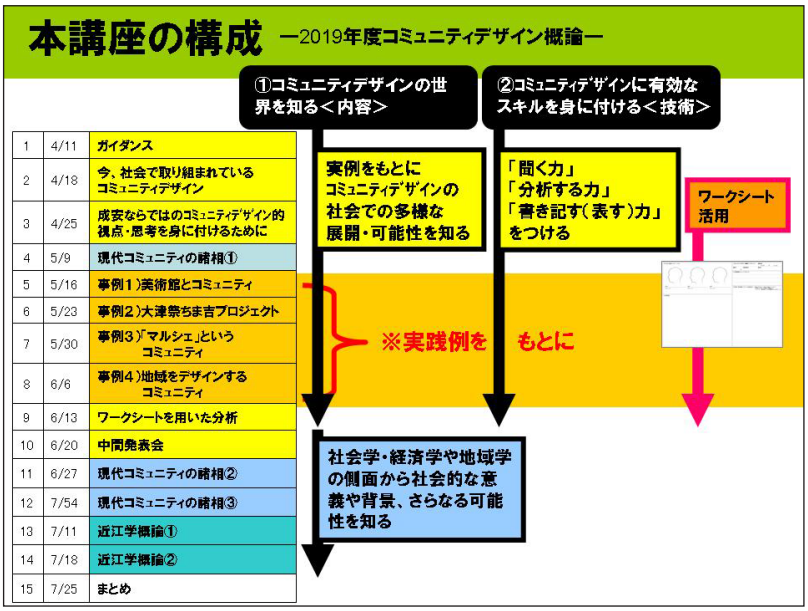


図２：概論の講義で使用しているPPTより「本講座の構成」

次項では、上記の授業内容の中で、成安造形大学独自のカリキュラムとして、その授業の中心となるコミュニティデザインの理解のために行う「手を動かす」という授業内容と、必要かつ重要な教材として新規開発したワークシート「関係性のシート」について論じたい。

（加藤賢治）

### 3-2　手を動かし自分ごとにする

コミュニティデザイン概論の授業構成においては、受講生にとって講座内容が単なる「お話」や「他人ごと」とならないよう、「関係性のシート」使用の前に、受講者全員が「自分をとりまく身近な現実のコミュニティ」を想起・自覚できるためのワークを行っている。

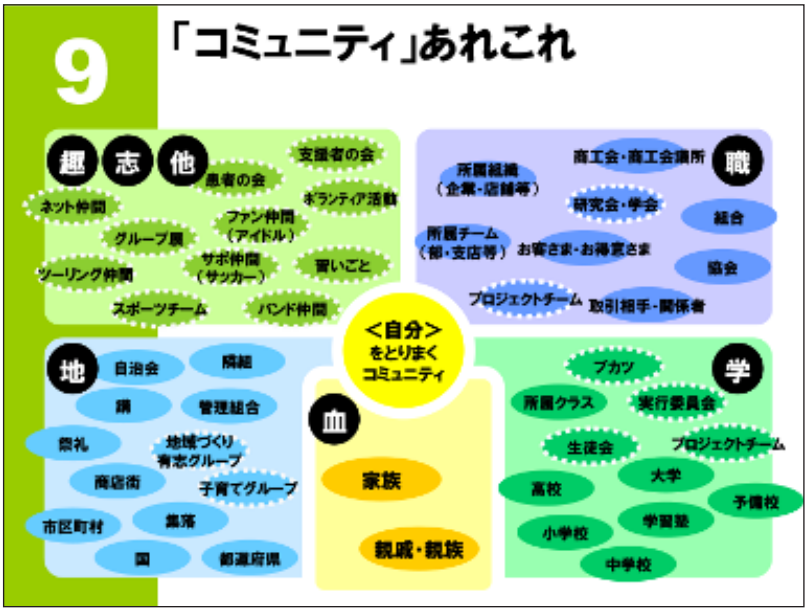


図 3：概論の講義で使用している PPT より「『コミュニティ』あれこれ」

図 4：受講生全員が図 3 に合わせて 5 つのゾーンにふせんを貼る

具体的には、受講生全員が 3 枚のふせんに自身をとりまくコミュニティ 3 種を 1 つずつ記入し、5 つの区分の該当するゾーン（模造紙）に自身の手で実際に貼ってもらっている。このワークを経験することにより、受講生自身がなんらかの複数のコミュニティに属し、また関わっていることへの気付きと自覚を促している。また、受講生全員のふせんをすべて一堂に貼り集め互いに総覧することにより、

多種のコミュニティの存在と、自分たちとの関わりのリアルを受講生一人一人に感じ取ってもらう機会としている。

５つのゾーンは以下の通りである。

・1「血」…家族・親族など血縁を中心としたコミュニティ
・2「学」…大学や所属クラス、部活など学びのコミュニティ
・3「地」…地域共同体ほかマンションの管理組合など地縁を中心としたコミュニティ
・4「職」…職場やアルバイト先などの職で結びつくコミュニティ
・5「趣・志・他」…習い事やバンド活動、ボランティア活動、ネットゲームのパーティーなど趣味や志で結びつくコミュニティ、ほか

### 3-3　ワークシート「関係性のシート」の設計

本ワークシートは、原則として本学においてすべての領域の学生が２年時に履修することを想定した「概論」にて使用するものであり、本学のコミュニティデザインの学びのベースとなるツールとして設計した。狭義のコミュニティデザインのみならず、全領域の学生の活動や学びと、実社会の人々や活動との相互の関係性を実感するためのツールとしての設計をおこなっており、受講生各人の専門領域の学びをそれぞれのフィールドで実践する際に、一種の思考モデルとして機能することをねらいとしている。また、授業内で特に注視を促すポイントにちなみ、このワークシートを「関係性のシート」と称している。

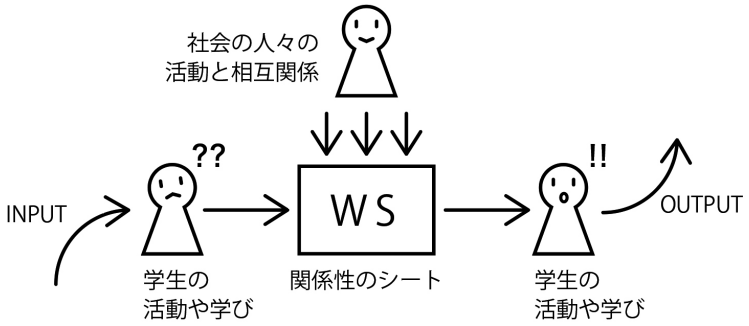


図５：実践のための思考モデルとしての「関係性のシート」

本ワークシートの基本設計については、前述のコミュニティデザイン研究会において検討を重ね、大枠が固められていった。当初、全学学生が受講するにあたり、耳慣れない「コミュニティデザイン」というデザインの概念そのものや、一線で活躍するゲスト講師の実践事例の話題が、学生自らの意志で選んだ領域の「外」と認識され、学生の興味・関心の向かない「他人ごと」として看過されないかとの懸念があった。また、これらを「座学」として一方通行的に本学学生が受講するスタイルへの危惧があった。

これらの課題を克服し、造形に本領を置く本学の学生自らが「自分ごと」に引き寄せて概念を掴み、事例の背景で作用しているデザインやクリエイティブの力を能動的に発見し掴み取っていくための一種の仮説として、鍵となりうるツールとして当ワークシートの設計をおこなった。

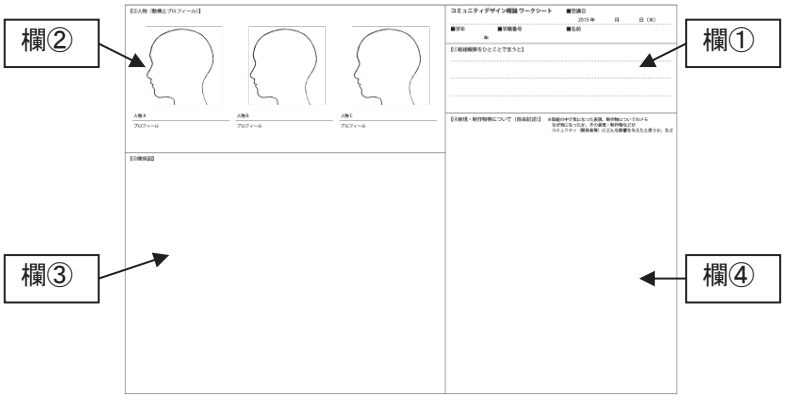


図 6：ワークシート「関係性のシート」（①～④欄からなる）

### 3-4　概要・設計意図

**・コミュニティデザインのフィールドノート**

…受講生一人一人が、現実社会における様々なコミュニティデザインの事例を、自分の感性と考えを通して解釈・採集し理解するための、一種の「フィールドノート」として機能することをイメージしている。

**・能動的な受講態度をつくる**

…概論の受講生が、社会での実践者（特別講師 4 名）の「お話を聴くだけ」との「受け身」の姿勢にならないよう、実践者の話しを聴く「前」のタイミングにあたる授業の導入時から使用を行う。これにより、4つの実践例を能動的に聴き取る受講態度をつくる。（実際の授業においては使い方に慣れるために、特別講師 4 名に先駆け由井がコミュニティデザインの実践事例の 1 つを細かくステップを踏みながら話し、これを当シートに練習題として書き表すという段階を設けている。）

**・授業を越えた効用を想定**

…概論における「実践例を聴く」際に限らず、学生の日頃の創作活動をはじめ、実際の社会の事象の中から、人々の関係性や相互の働きかけ、その背景にある意図や動機を見つけられる視点を身につけることをねらいとする。

**・造形および表現と、事象の関係に注目**

…上記の「人々の関係性」に対して、造形力がどのように影響を及ぼすかに注意を向けられるように設計している。（詳細は後述の 3-5 欄④参照）

**・ビジュアルによる構造化**

…受講生各人が、聴き取った事例を、言語化による把握・整理はもちろん、造形大生の持ち味を活かしたイラスト化、図化、構造化

等の「ビジュアル化」を通して把握・解釈・整理を行っていく力を、当シートを使うほどに伸ばしていけるフォーマットとしている。

**・固定化せず柔軟な運用、柔らかな包容力あるツールへ**

…授業を通して身につけてほしい着眼点への誘導機能を備えている一方で、2年生全員が受講することを重視し、領域の異なる受講生各人の多様な捉え方による解釈や表現の自由度を確保し、受講生の個性に応じたフレキシブルな活用ができるものとしている。

### 3-5 「関係性のシート」各欄の詳細

**・欄①：「取組概要をひとことで言うと」**

話者（特別講師）の話す取り組みの核を短い文章（言葉）に凝縮し書き表す欄。

※概論での運用にあたっては話しの全容を捉えても良いし、受講生が気になった部分にフォーカスしても良い、としている。

**・欄②：「人物（動機とプロフィール）」**

事例紹介の話の中で出てきた実際の人物の中から3名（または3組）を取り上げ、彼ら一人ひとりの簡単なプロフィールとともに、各人に共通する思いや異なる動機を見つけ出し可視化する欄。人物頭部のシルエットに対する面積比を工夫するなどによって、各人物が抱く思いの強弱等のバランスが柔軟に書き表せるフォーマットとしている。

**・欄③：「関係図（人と人、人とコミュニティ、コミュニティとコミュニティの関係）」**

欄②でピックアップした人物を中心に、彼らが誰に対してどのような影響を与え、また、与えられたか、人やコミュニティの間で交わされる働きかけや影響と、それにより形成されるネットワークやコミュニティの変化を図化し書き表す欄。加えて人に限定しない関係性とその変化にも着目を促す。

※概論での運用にあたっては、「関係性」を広く解釈した様々な表現を歓迎する、としている。

**・欄④：「表現・制作物等について（自由記述）」**

欄内に「取組の中で気になった表現、制作物についてのメモ／なぜ気になったか、その表現・制作物などがコミュニティ（関係者等）にどんな影響を与えたと思うか、など」との補足説明を入れている。人やコミュニティの関係性が変化していく際に、造形の力がどのように影響を与えているか、現実社会におけるタッチポイントとその作用を見つけ出し、鍵となる表現や制作物を記入する欄としている。なお、この場合の「表現」「制作物」とは、ソフト、ハードを問わない。

※概論での運用にあたっては、このほかに「自由記述欄」としての機能を持たせ、どの欄にも収まらない気付き等をなんでも記述することができ

る自由度の高い欄として、タイプの異なるさまざまな受講生の反応を吸収できるフォーマットとしている。

### 3-6　受講生による実際の「関係性のシート」記入例

受講生による当シートの実際の記入例を紹介する。設計意図の基準に近い使い方をしているものや受講生の自由なアレンジによるものがあり、概論においてはそのどれをも歓迎している。

以下はいずれも 2019 年度コミュニティデザイン概論の第 7 回ゲスト講師の岩田氏（マルシェというコミュニティ）の回のものであり、同じ話題を異なる表現・使い方で表している。「③関係図」に注目すると、話者（岩田氏）を中心に人やコミュニティ相互の関係性を矢印を用い図化した、設計意図に近い表現や（図 7）、取組の進展に伴う環境や状況の移り変わりを図化したもの（図 8）がある。ほかにもコマ割による漫画仕立てとしたもの、絵画的な表現のもの、シンプルな図形に凝縮し構造を見つけ出そうとするものなど様々な試みによる表現が見られた。また欄④では「表現・制作物」に焦点を当て書き表すほか、「自由記述」として受講生自身が話者から刺激を受けた結果「自分はここに取り組みたい」との「自分ごと」に考察が至り、「自分の課題」としてこれを書き表しているものがある。

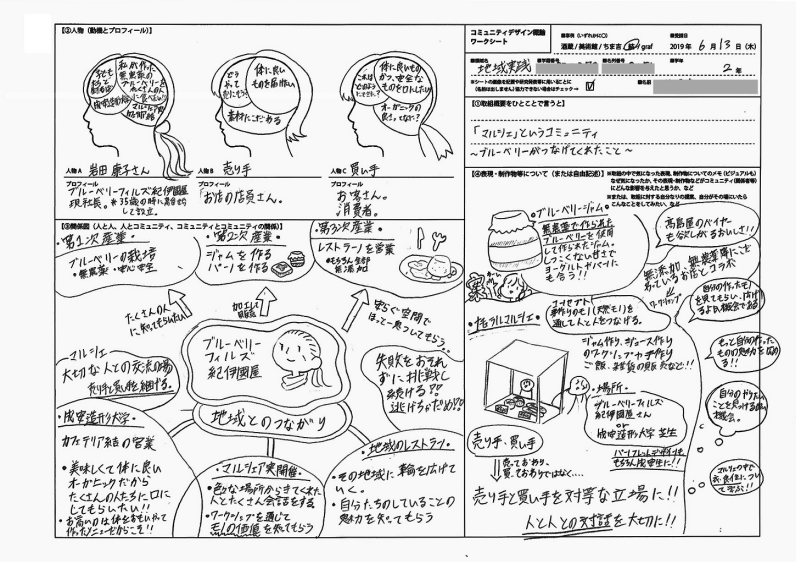


図 7：欄①②③④とも、「関係性のシート」の設計意図の基準に沿った記入がなされている例
（欄③は、話者を中心に人やコミュニティ間の相互の働きかけと関係性を図化）

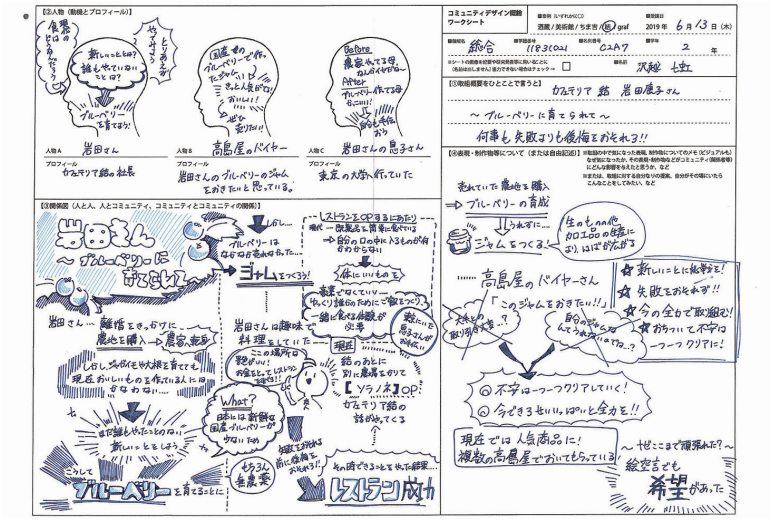


図 8：欄③で、取組の推移に伴う状況の変遷をビジュアル化した例

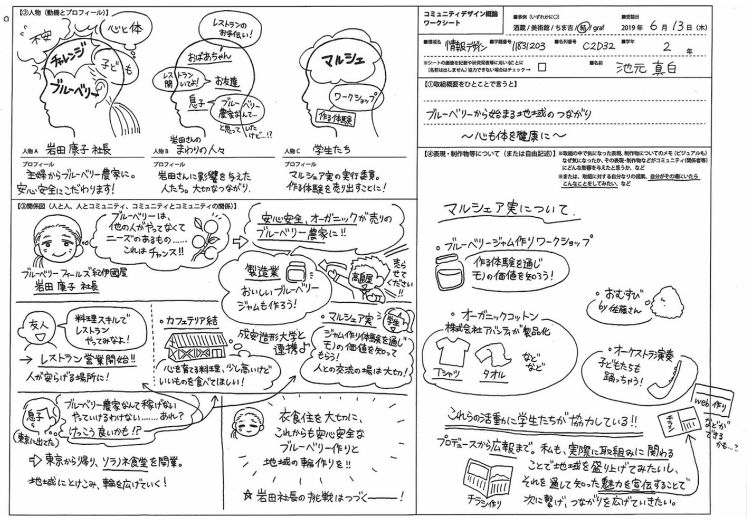


図 9：欄③をコマ割りして登場人物各人の思いや行動を詳細にひも解いた例

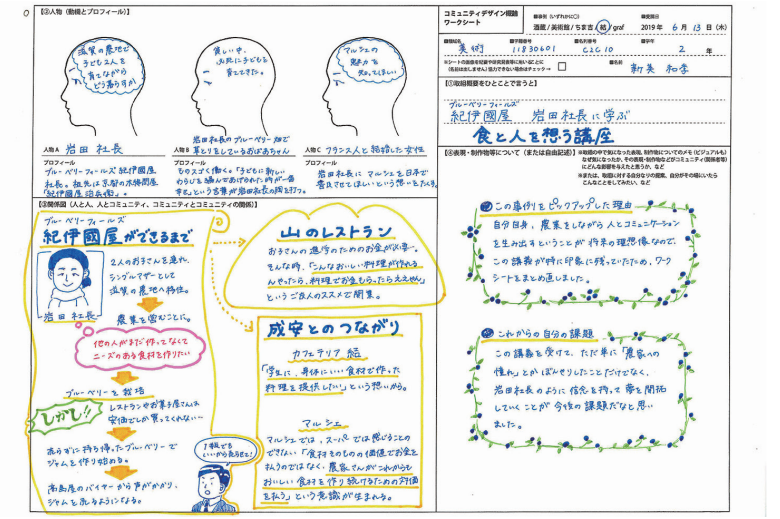


図 10：欄③に、話の核を成す 3 つの焦点をフレーム囲いで表現、欄④に受講生が話から刺激を受け自身が取り組みたいと思った課題を記入した例

（由井真波）

## まとめ

現在、世界的な潮流として、先進国や大都市に一極集中した社会構造から、サステナブルな分散型社会へと社会構造の変革期にある。日本では地方創生が叫ばれ、人と人、コミュニティとコミュニティの繋がりからなる有機的なネットワーク社会を踏まえた思考方法や活動姿勢が求められている。

ここまで述べてきたように、本論考のテーマである「概論」は、複雑に重層化している現代コミュニティのなかで、地域・経済・生活・文化や、そこで生まれる価値などを、そこに関係する人々を軸に考察し、さらに近現代コミュニティの諸相や地域学を踏まえながら深化させる全体設計となっている。地域に学びながら主体的・能動的な汎用的能力や創造的思考能力を醸成し、社会人基礎力をはじめとした学士力の形成や、特に造形活動をその礎とする芸術大学における人材育成に資するものとなり、さまざまな社会的要請に応えながら、前述（1. 授業の位置付けと意義）した２点（地域に学ぶことの重要性、ものづくりを核とした本学独自の「コミュニティデザイン」）を満たし、本学の社会実践科目群の基幹となる科目としての役割を果たしている。

授業中盤（3回目、5～8回目）の実践事例解説では、本学でのプロジェクト演習など、学生が自分ごととして投影しやすい事例から導入し、地域のリソースを活用し起業していく事例など、やや学生からは距離のある実践事例へと進んでいく授業構成となっている。いずれの事例でも、それぞれが抱える課題・資源・資産など環境的要素や、各ステークホルダーの当初の動機や意識が拡大・伝播しネットワーク化していく人的要素、経緯とともに変化し新たな段階へと現在進行形で展開していく様や、それらがもたらす成果などを具体的に解説していった。

受講者は「関係性のシート」を聞き取りツールとして活用し、これら複雑に関係し合う要素を抽出し咀嚼しながら構造化する経験を積むことになる。その過程で、人々の関係性から生まれるコミュニティとその活性化が核となり価値生成に至っていることに気づくことになる。

あらゆる物事の成り立ちや関係性・流れから、学生各自が「物語化」し、図像化・図式化し「見える化」しながら整理し構造化する思考モデルは、芸大生にとって無理なく自然に体得できる手法としての可能性を持ち、手を動かし自分ごとにするという、授業設計意図に沿ったものとなっている。また、学生によっては、関係者の思いや行動の連鎖、時系列でのコミュニティ環境の遷移など、その観点や軸が異なることも興味深い。さらに、この「関係性のシート」の活用トレーニングは、自分の考察内容を論理的に他者へ伝達する上でも非常に有効な手段となり、受講後の表現・発信活動にも寄与することとなる。

ものづくりを核とした本学独自のコミュニティデザイン教育として、「概論」を受講して得られるこれらの視座は、コミュニティとは何か、人々やコミュニティの関係は、造形活動がどうコミットしていくのか、そこにどのような価値が生まれるのか、など、アートやデザインと社会との接合点の可能性や、クリエイターとしての生き方を受講者に示唆している。自らの立ち位置の確認とリレーションシップの育みに有用な視点となり、新たなコミュニティ形成とそこでのアートやデザインの役立ちを受講者たち自身が見出し、今後の制作活動に活かしてゆくことを期待している。

なお、平成27年（2015）度の開講から平成31年（2019）度に至る5年間での「概論」の授業改善経緯や成果などは、今後「芸術大学における『コミュニティデザイン概論』授業の変遷と展望」で論ずる予定としている。また、コミュニティデザイン論1及びコミュニティデザイン論2への展開は、別稿の「コミュニティを発見し自ら働きかけるワークシート3種の設計―コミュニティデザイン概論、コミュニティデザイン論1、コミュニティデザイン論2の授業から」で論ずる。それぞれの詳細はそれらを参照されたい。

（田中真一郎）

［註1］　コミュニティデザイン研究会当時の活動と検討の内容は別途以下の紀要を参照。
成安造形大学紀要第6号「平成26年度特別研究助成　状況報告　芸術系大学で『コミュニティデザイン』を学ぶ意義」著者：津田睦美　共同研究者：由井真波、田中真一郎、大草真弓、加藤賢治、石川亮
成安造形大学紀要第8号「平成26年度特別研究助成　成果報告　芸術系大学で『コミュニティデザイン』を学ぶ意義」著者：津田睦美　共同研究者：由井真波、田中真一郎、大草真弓、加藤賢治、石川亮

**参考文献・論文等**

成安造形大学紀要第6号「平成26年度特別研究助成　状況報告　芸術系大学で『コミュニティデザイン』を学ぶ意義」著者：津田睦美　共同研究者：由井真波、田中真一郎、大草真弓、加藤賢治、石川亮
成安造形大学紀要第8号「平成26年度特別研究助成　成果報告　芸術系大学で『コミュニティデザイン』を学ぶ意義」著者：津田睦美　共同研究者：由井真波、田中真一郎、大草真弓、加藤賢治、石川亮
成安造形大学紀要第11号「コミュニティを発見し自ら働きかけるワークシート3種の設計―コミュニティデザイン概論、コミュニティデザイン論1、コミュニティデザイン論2の授業から」著者：由井真波